

中根東里 覚書その一

— 幼児教育史料 —

山内昭道

中根東里と新瓦

中根東里という名前を知ったのは、畏友小林竜雄氏から「東里遺稿解」を惠贈されたことによる。小林氏はその発刊について次のように記述している。

「中根東里は近世に於ける数すくない陽明学者であり、享保二十年（一七三五）四十二歳の頃より二十年近く下野佐野庄にあって知松庵（元宝竜寺境内、現天明小学校々庭に建てられていた）なる学塾に独居し、悠々自適の生活をおくられた碩学である。先生の徳風を慕って学ぶもの多く、天明の聖人と仰がれ、郷人の東里を慕うこと、慈父の如くであったという。

東里の高弟、越名河岸の須藤温（子道）は先生の歿後遺稿をまとめ、『東里先生文集』として出版した。後に医家服部政世は文集にもれた書簡や、その他の遺文を苦心して集め「外集」とし、温の編集した文集と合せて『東里遺稿』として梓行した。これらは、版木による出版で、当時の佐野の知識人の文化的な質の高さを物語るに足る。

今般私は須藤温の流れをくむ子孫の方々の御協力を得て中根東里遺稿刊行会を

作り、『東里遺稿解』（糸川信也編著）を発刊する運びとなった」（篠崎源三著 中根東里まえがき）

小林氏は宝竜寺の住職であり、その経営になる呑竜幼稚園の園長として知友を得ているが、この書を惠贈された時「東里には幼児教育に關係したものがある」といわれた。

即ち、東里遺稿解の中の「新瓦^{比が}」という一篇であった。

さて、新瓦は漢文で記述されたものであるが、口語訳によって、その序文を用いて示すと、この著作理由が明らかになる。

「延享三年（一七四六年）丙寅の年。私は下野（栃木県）の知松庵に住んでいた。この年冬、弟の叔徳（よしのり）が幼女芳子を連れて相模（神奈川県）からやって来て、芳子を私に預けて帰っていった。翌年丁卯の年（一七四七年）の夏、芳子はまだたった四歳、まだ教育できる年ではなく、しかも私はすっかり老いぼれてしまった。そこで自分の聞き知っていることをあれこれ述べて一

編の本にし、鳥や動物の絵を端に描き、それに色彩をほどこし、この本を『新瓦』と名づけた。そしてこの本を芳子の玩具として持たせたのだ。どうか、いつかは私の書いた文が読み解けるようになって、自ら修養を積んでもらいたいと願ったからである。あるいは、そこまでいかぬとしても、世の中にたくさんいる教養ある方々の誰かが、この本をもとにして芳子を教育してください、私はたとえ死んでも、私の意図はあとに残って充分役に立つと考えたのである。』（口語訳糸川信也 東里遺稿解 九四頁）

芳子の出生から、東里のもとへ来るまでの事情から始まり、芳子と東里が名づけた理由、書のすすめ、婦人としての生き方など芳子を「玉とせんと欲す」（前掲書一七八頁）ために著作されたのであるが、

姿、汝芳子 ああ、なんじ よしこ

という冒頭句が 繰返してあり、芳子への愛情に満ちたものである。

東里と生活したのは、延享三年（一七四六）から寛延二年（一七五〇）までの四年間であり、三歳から八歳までであった。この間における芳子の姿が語られ、芳子への教育思想が述べられている。したがって、日本の幼児教育思想の一つが、ここにあるという小林氏の指摘には正しいものといえる。

そこで、私はこの東里の新瓦が、現在まで幼児教育史の中でどのような評価をうけてくるかに関心をもち、調べてみた二、三の知見について述べてみたい。

日本幼児保育史と東里

日本幼児保育史第一巻の江戸時代の幼児保育の中で取りあげられているものは次のようにある。

中江藤樹

山鹿素行

貝原益軒

江村北海

佐藤信淵

大原幽学

林子平

伊勢貞丈

幻心

東里のことはない。

このことは、日本の幼児教育史では、東里は見落されているのか、芳子という個人教育というところで、取りあげられなかったのかである。しかし、日本の保育史については、日本保育学会が、企画した日本幼児保育史全六巻が、最もよく調査研究されたものであり、これにないことは他の保育史の著作に、東里は出ていないのは当然であるかも知れない。

おそらく、東里は、その著作である「東里遺稿」が、一般に知られていなかったためであろうと想像される。

東里遺稿解の参考文献を見ても今まで東里遺稿が単独で印刷出版されていないという事情がありそうである。

参考文献としてあげられているものは次の書である。

・『菅神廟碑銘解』 田沼謙之著 立志堂柳雲堂共同出版 文久二年春発行

・『先哲叢談』 谷壮太郎編 江島本店 明治十七年一月発行

- ・『日本倫理彙編・第二編』△陽明学派中・中根東里▽の項 井上哲次郎・蟹江義丸共編 金尾文淵堂 明治三十四年五月発行
- ・『漢学者伝記集成』 竹林貫二編 関書院 昭和三年発行
- ・『中根東里伝の研究』 内田旭著 静岡県郷土研究第八輯 昭和十二年三月発行
- ・『天明の聖人中根東里先生』 松濤在竜著 松田刷司寮 昭和十五年三月発行
- ・『天明之聖人中根東里先生』 小林龍雄著 自製出版 昭和十九年十二月発行
- ・『佐野庄』△中根東里▽の項 篠崎源三著 佐野ロータリークラブ 昭和四十二年一月発行
- ・『開けゆく安蘇』△近世の安蘇▽の項 佐野市・安蘇郡教育会共編 共同出版 昭和四十三年十一月発行
- ・『上毛の文人』△高橋道齊について▽の項 本多夏彦著 本多夏彦著作刊行会 昭和四十七年五月発行

日本における幼児保育の先駆者として、これから研究されるべきものと考えらる。

そこで、東里が教育史又は教育学の中ではどのようなようであったであろうかに関心をいだき、あたってみた結果、次の三つが見つかった。

小西重直 現今教育の研究 明治四五年

総頁数七九三頁の書で、その第四章教授法の変遷及現今の研究の第二節 東西直観主義の特色の項に、ラトケ、ペスタロッチ、ライを西欧の直観主義として解説した後、貝原益軒と中根東里を日本の直観主義としてあげている。益軒は

五行で解説し、東里については新瓦から引用して、四頁四十行に及んでいる。

「殊に陽明学者の中根東里先生の『新瓦』に於て、吾人は亦西洋に於て未だ研究せられざる別種の直観主義の意味を見出すことを得。」(一五一頁)という書き出しで始まり、「要するに西洋に於ける直観主義の理論は主として児童の心意状態と教養者の精神との両者を基とす、直観教授の真義、実に我日本に於て発達せりと言ふべし。時に延享四年にして、今より百六十四年前のことなりき」(一五四頁)と結び、高く評価している。

新瓦からの引用文が、漢文で示されている。引用されている漢文を口語訳によって示すと次のとおりである。

「そもそも幼児をかわいがるものは、たいていは、物の名をそのまま呼ばずに、ゼスチュアで示したり、その鳴き声を真似たりしてわかりやすくたとえて示すものである。そうでなければ、ことばを重ねて言ってみたりする。手を『おてて』と言ったり、乳を『ばいばい』と言ったり、寝ることを『ねんね、ねんね』と言ったり、起きることを『おつきおつき』などと言ったりするのがそれである。もし、鼓の音を言うのであれば、その音を重ねてドンドンなどと言う。食べもの、おいしいのを言うのであれば『ウマウマ』というし、小便がたくさん出るのを、『ジョージョー』などと言うのである。このような表現は、その実物を具体的に言つて教育しようとする意図から出たものであるから、かりそめにはしないことだ。ところが、幼いものに話をするとき、これをさげすみ、厭っている場合は、このような表現は用いないものである。幼児はそれに同化する。だから幼児が口にするこぼは、皆耳で聞いたものである。ところでおまえは『ジョージョー』などとかわず、『小便』というのだ。まるで大人のようなのである。だから、老婆

が日頃どんなことばでおまえに接していたか推察できる。(東里遺稿解二一五頁)
これは、東里が、芳子が来た時、今までどんな生活をしていたか推察した部分で、西隣の老婆が、今までのように芳子を扱ったを芳子のことば、表情、行動を通して五つの論拠にあげた中の第三番目の論拠である。

私は東里が、ペスタロッチと比較され、高く評価されていることに驚くと共に、明治時代は漢文の素養が十分にあったことが、東里が評価される素地となっていたように考えられる。

湯川光雄 教育思想余影 先人を駆る 昭和五年

これは古今東西の哲学者文学者などの名言を集めたものであるが、取り上げられていた江戸時代の日本人は次のようである。

藤原惺窩	中江藤樹	谷 時中	林 羅山	松永尺五	山崎暗斎
山鹿素行	熊沢蕃山	木下順庵	徳川光圀	安東省庵	伊藤仁斉
雨森芳洲	浅見綱斉	貝原益軒	荻生徂徠	三宅石庵	伊藤東涯
室 鳩巢	三輪執斉	石田梅巖	大宰春台	服部南郭	中根東里
本居宣長	細井平洲	皆川洪園	亀井南冥	塙保己一	頼 山陽
平田篤胤	藤田東湖	二宮尊徳	佐藤一斎	吉田松陰	会沢正志斎
佐久間象山	念仏坊	蜀山人	十返舎一九	太田錦城	

東里は第六編、教育の基礎たる哲学編にある。
「人は天地の心である。故に天地は人の身である。」

万有の本体は吾人自身と同一性質のものである。故に人間は天地の心を以て

心とし行けばよい。」

この原文は「人の説」の一部又は要約であろうと思われる。即ち、知松庵の壁に書いて、同志に告示した文章である。漢文でその部分のみ示してみよう。

人者天地之心也。故天地者人之身也。万物備焉。無内無外。無始無終。何時非仁。何処非中。欣合和暢。浩浩悠悠。此謂宇宙。宇宙即是人。人即是宇宙。人之大全也。

(東里遺稿解二〇九頁)

この人の説は大人の歌と共に「いわば晩年の東里の思想を集大成した形で書かれている」と桑川氏はいつている。

高野辰之 江戸時代儒者の書 近世日本の儒学 昭和十四年

これは論文集で、その中の表記論文の中の四、宝曆儒者の中に記載がみられる。

「中根東里は始め徂徠に学び、次いで鳩巢に就いたが、晩年陽明学に転じた人である。もと僧侶で、妻もなかったが、弟の遺子を鞠育し、初歩の文字学習用として『新瓦』を著はし、始めて範語法を工夫した人、恐らく吾が邦に限らず、世界に於ける範語法の率先者であろう。躬行を力めた純儒ともいふべき人であって、其の書も甚だ謹嚴で、法帖を学んだことは疑が無いが、出自は知られない。俗簡は力めて平俗些の銜気を見ない。」(九二二頁)

範語法とは「初等教育に於ける国語教授の一方法。実物又は図画によりて、観

察も談話せしめ、次に、その実物・図画を写さしめたる上、これに相当する単語を示し、その単語の音を分解して、読方・書方を覚えしむるもの。現今の国語教授法は、主として、これに依る。」と日本辞典言泉(昭和三年、落合直文著、芳賀矢一改修 三七五〇頁)に説明されている。高野氏は前記小西氏の引用された部分をさしているものと考えられ、それが国語教育における教授法として位置づけられている。

なお東里は、六歳の芳子に次のようなことを行なっている。

「僕は、芳子と手をつないで植野を歩いて来たのですが、その時、西のかた富士山を指さして、芳子に「わたしたちの祖先のいるところだよ」と教えたのです。そして、さすらいの悲しみを思ったのです。又、芳子が、幼くして故郷を離れ、そのことを自分では意識すらしめないあわれさと思ひ、次のような意味の詩を作りました。

荒れ野に連れられて、
厳しい秋の霜を踏み

西の山々を望み見れば、
故郷を悲しくも懐しむ。

ああ、故郷ははるか南のかなたにある。

はてしない青空を見あげるにつけ、
心はいたむ。

そして芳子に言いつけて、朝に夕にこの詩を暗誦させたのです。将来、親を思うようになったとき、この詩の心を知り、幾度もくり返して詠ずるのではないかと思うのです。」

(東里遺稿解 一八二頁)

詩の原文は次のとおりである。

率曠野兮履秋霜。望西山兮悲故郷。

嗟桑与梓兮在波陽。

悠悠曼天兮俾心傷。

曠野に率ゐられて、
秋霜を履み、

西山に望みて、
故郷を悲しむ、

嗟、桑と梓とは、
波の陽ひななに在り、

悠々たる曼天心を傷ましむ。

(前掲書一七七、一八五頁)

この難解な漢文を暗誦させた時、東里はしみじみと、故郷を、父母のことを語っていたにちがいないであろう。ここにも、範語法が生かされていたのであろうか。

あとがき

小林氏から、東里遺稿解と篠崎源三著中根東里を惠贈されたことが機縁になったこと、たまたま、私が手に入れた前記現今教育の研究の中に記載があったことで、東里への関心をいだかせた。

折にふれて、東里を求めた現在までの結果を、断片的であるが記録したものである。来年は日本に幼稚園が誕生して百年にあたる。こうした折に、日本の幼児教育の先覚者として、中根東里が再評価されるべきだと考えて、散えて不完全ながら発表した。

中根東里の伝記によると、東里は父の眞福を修めるために禅寺に入り、その後宇治黄蘗山悦山禪師に師事したが、不立文字として広く書を読むことを許さなかつたために、寺をぬけて江戸に帰り、下谷の蓮光寺に住して浄土宗を究め、經典を精読した。住職立蒼上人は荻生徂徠に紹介した。東里の文才を徂徠は賞賛したが、徂徠の学風に疑いをいただき、自作の文章を焼き捨ててしまった。室鳩巢の門に入った後、独立するが、竹皮草履や木綿糸を売り、数日の生活費を得ると、戸

を閉じてひとり読書をふけた。竹皮草履先生と冷笑されたという。(篠源原三著 中根東里による)

中根東里との機縁を与えられた小林龍雄氏に深く感謝すると共に、今後、東里の教育思想について、多くの関心が生まれることを祈念するものである。